

平成23年度「重点研究費」研究成果報告書

申請区分	C	配分額	150000 円
研究課題	外国人日本語学習者のための効果的な会話指導に関する研究 —日常会話における「曖昧表現」の使用目的と効果—		

研究代表者

氏名	所属	職名
許 夏玲	留学生センター	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字)

本研究では日常会話に用いられる曖昧表現の用例を調べ、これらの表現の使用目的と効果を明らかにすることを目的とする。

まず、話し言葉が多く用いられる10代、20代、30代、40代の男性雑誌(4冊)と女性雑誌(6冊)を考察した。その結果、とりわけ10代と20代の雑誌において、「すごい」(内訳:女性雑誌42例、男性雑誌34例)「っぽい」(内訳:女性雑誌36例、男性雑誌1例)が一番多く、次に「じゃない」(内訳:女性雑誌26例、男性雑誌10例)「みたいな」(内訳:女性雑誌8例、男性雑誌1例)が多く用いられることがわかった。

しかし、日本語母語話者の日常会話では、親疎関係(親2組、疎4組)に関わらず、20代と30代の間では「とか」(内訳:親82例、疎152例)「なんか」(内訳:親112例、疎149例)が一番多く、次に「すごい」(内訳:親34例、疎44例)「みたいな」(内訳:親27例、疎42例)「じゃない」(内訳:親19例、疎42例)が多く用いられることがわかった。日常会話でよく用いられる「とか」「なんか」「すごい」「みたいな」「じゃない」の中で、本来の用法から新しい用法へと変化するものもあった。

「すごい」は現在とくに若者がたいしたことでもないことも感動した振りで使ったり、自分の気持ちを大げさに表現したりするときに用いられる傾向がある。また、「すごい」は形容詞が品詞の前につくと「い」が「く」に変換するという機能が薄れており、フィラーとして用いられることもある。

「なんか」もフィラーとして用いられ、話し手の発話時の躊躇いの気持ちを表すと考えられる。

「とか」は話し言葉において、「阪神とか好きじゃないのって言ったら」のように話し手が否定的評価を控えようとするために用いられることがある。

「みたいな」は「ちょっと頑張ろうかなみたいな」のように話し手が自分の意見や判断をぼやかすため、あたかも第三者の立場から述べているように用いられる。

「じゃない」は英語のタグクエスションと似ている働きを持ち、「でしょ」といった強い確認の口調より相手の同意を求める意向で自分の意見を示しているため、表現がいくらか和らぐと考えられる。

「日常会話における曖昧表現の使用目的と効果」について考察し成果をまとめて2012年8月に予定している名古屋大学の日本語教育学会国際大会の研究発表に応募した。また、「外国人日本語学習者のための効果的な会話指導に関する研究」の一環としてこれまで行ってきた「会話参加者によるFTA軽減ストラテジーの使用実態」に関する会話研究の成果を2012年3月に社会言語科学会の研究大会で発表した。

そのほか、2012年2月に本学の大学院生と学外の研究者を対象に「コーパスを用いた日本語の研究」のワークショップを行った。当日のワークショップの参加者は、計20名だった。参加者よりワークショップに対する良い評価が得られた。

研究成果発表方法

2012年8月に予定している日本語教育学会国際研究大会（名古屋大学）の研究発表に応募した。現在、審査中である。